

(リ-ラ-ト)
16. 3. 20 改 3
02. 4. 30 改 2
02. 4. 21 改 1
02. 4. 14 付

ホツマツタエの暦の考察

ホツマツタエ史学研究会 吉田六雄

まえがき

南信州に昼神温泉郷がある。昼神温泉郷には、東京近郊からは中央自動車道に乗り飯田インターで降りる。あと中央自動車道に沿うように名古屋方面に向かい約11Km走行したところにある。この昼神温泉郷の住所は、長野県下伊那郡阿知村になる。今回のお話の元になる由来の地は、村人から聞いたことであるが、「数学の神様」と慕われると云う、また東大などや宇宙公団などのロケット関係者が訪れると云う「阿知神社」である。

阿知村・商工観光課の大下さんから送って戴いた昼神温泉郷のパンフレットには「阿知神社」が案内されており「知恵の神、天思兼命が祀られています。曲尺を発明した神としても有名です。」と記載されている。

また現在でも木造新築の屋根に匠神、大工神として「八意思兼命のお札」を家の守り神として屋根裏に祀つる風習が続いている。ホツマツタエにはこの思兼命について、「昔日読みの 思兼 暦作りて ここにあり」と記載し、現在の阿知村の名前の元が思兼命の「諱名・アチヒコ」を今に伝えていることをホツマツタエより知るところとなる。

月に関する古語

満月が薄暮に浮かぶ姿は「明日の幸せを約束してしてくれる」と感じる。まして年始めの満月は縁起がいい。そんな天上の月を私たちが何気なくながめ使っている言葉に「お月見」や「満月」「三日月」がある。

古くには、「満月を望月」「三日月を弓張月」と呼んでいた。また同じ月でも「年月の月」の呼び名は、古くは「1月を睦月」「2月を如月」「3月・弥生」「4月・卯月」「5月・皐月」「6月・水無月」「7月・文月」「8月・葉月」「9月・長月」「10月・神無月」「11月・霜月」そして「12月を師走」と呼んでいた。このことは少し暦に関する知識ある人はすでに知り得ることである。

月に関するホツマツタエの呼称

私の歴史への興味の始まりは、聞き伝えに日本は単一民族であると認識していた。そんな中にも我が民族の歴史は遡ることは西暦で何年前になるかまた知り得る本はないか探し続けた。そのために本屋で古代史と名前が付けられて本をむさぼり読んだ。約30冊を読むころホツマツタエの本に知ることになった。このために1年余りは悪戦苦闘したが、少しは理解できることになった。そのホツマツタエでは、お月見の月や年月の月の呼称が現在の知識では知り得ない呼び名で記載されていた。このことは私なりに大きな発見であった。「満月・望月をモチ」「三日月をユミハリ」と言うらしい。

また「年月の月」の呼び名は、次の様になっていた。現在・古語呼び名→ホツマツタエ呼び名の順に記載する。特に6月の水無月が→セミナツキと呼ぶことは初耳だった。また10月の神無月が→カミナツキ・カナツキ・メツキ。11月・霜月が→ネシモ・ネツキと呼ばれていたことも新たな発見であった。

月名	→ホツマの記述
1月・睦月	→ムツキ・ハ
2月・如月	→キサラギ
3月・弥生	→ヤヨヒ
4月・卯月	→ウツキ
5月・皐月	→サツキ
6月・水無月	→ミナツキ・セミナツキ
7月・文月	→フミツキ・フツキ・フ
8月・葉月	→ハツキ・ホツミ
9月・長月	→ナガツキ・ナツキ・
10月・神無月	→カンナツキ・カミナツキ・ カナツキ・メツキ
11月・霜月	→シモツキ・ネシモ・ネツキ
12月・師走	→シハス

私なりに6月のセミナツキを漢字呼称で表現すると「蟬鳴月」・・・沢山の蟬がなく月。10月のカミナツキは、「神名月」「神奈月」に訳できることが楽しい。こう考えるとホツマツタエの月呼称は、なんとロマンあふれている月の呼び名になること受け合い。

ホツマツタエとは

ホツマツタエの言葉を初めて読まれる人へ、その内容について簡単に説明する必要がある。ホツマツタエは、伊勢神宮の外宮に祭られているトヨケ神、内宮に祭られているアマテル神の頃より神武天皇を経てヤマトタケが亡くなる頃までの日本建国の歴史を記録した記録文書である。文章はオシデと呼ぶ古代文

字が使用されて、全巻四十章からなる。また文は全体が五七調で記載されて、記載の文字数は約十一万百字、行数は九千百七十余になる膨大な史実を保存した資料と云える。

ホツマツタエの暦日を作った人たち

ホツマツタエの文中には、暦日がふたつある。

二つの暦は初めて聞く言葉と思うが、一つ目の暦はスス暦またはマサカキ暦、またもう一つの暦はアスス暦である。神田の古書店でホツマツタエを発見された松本善之助先生の発行された月刊・ほつま124号（発行昭和59年5月1日）では、池田満氏が「古代日本の固有暦の歴史」と題してホツマツタエの文に記載されている内容を紹介している。

その暦日の作成経緯を介摘んで次に説明すると、『暦を作った人たちは「初代クニトコタチ」→「オモイカネ」→「ムラクモ」→あと「アマノコヤネ」に譲られた。暦の特徴は「マサカキの枝を数えた・マサカキの暦」→「閏月を取り入れた・オモイカの暦」→「アススの暦」変わった。しかしまだ、云い尽くしきれないことが多く残っている。それはマサカキの暦の構造についてや、季節との関係などである。』

スス暦とは

この暦は「マサカキを植えて数える」とし、植え継ぎは「千枝の年に種植えて明くる年生えるマサカキを植え」としている。またマサカキとエトの関係は「エトの一周りで明くる年とし、エトの二順目の初めてのエト・キアエ（1）より枝と穂と数え、一枝六十、十枝は六百年、百枝は六千、千枝に六万をあまもりの一周りづつ暦なる」と記載している。日には、「弥生ツイタチ」などから旧暦、新暦と同様の月日の運用したことが記載されている。暦のエト単位は穂、枝、鈴になっている。

アスス暦とは

スス暦が改暦されてできた暦である。二十一穂キナエ（21）の春には、スス暦の五十スス二十一穂としてまた、アスス暦の二十一穂の年として暦が数えられこのことをホツマツタエは「二十一穂の キナエ（21）の春は アメフタ エ 天鈴暦と 名を変えて」と記載している。

スス暦・アスス暦の暦記載の抜粋

著者がスス（訳：鈴）暦・アスス（訳：天鈴）暦についてホツマツタエの40文を読み返し暦日の部分を抜粋して見た。抜粋の根拠はこの暦日が「暦の解説」には必要であり避けて通れないことである。読み始めばかりの読者には、多少は読み飽きるものとするが一読の価値を残している。

(注記) ホツマツタエ原文の対訳

ホツマツタエの原文の数字対訳は、初めての方わかりづらいため「ヒフミヨキムナヤコ」を「一二三四五六七八九」に訳した。「ソ、モモ、チ、ヨロ」は「十、百、千、万」に訳した。また原文エトの作られ方はのち説明するが、エトは1～60までの1巡にて構成される。このため予めエトに付番し()内に数字を記載した。

スス暦の抜粋

- ・二十一の鈴の 年すでに 百二十万七千五百二十に
- ・二十一鈴 百二十五枝 年キシエ(31) 初日ほのぼの いずる時
- ・二十一鈴 百二十五枝 三十一穂キシエの 初日の出
- ・百二十六枝 年サナト(58) 弥生ツイタチ
- ・これを暦の ウリフ月
- ・二十二鈴 五百五枝初に
- ・ネナト(10) 弥生の 望よりぞ ウ月の望に
- ・今年 二十四の 折鈴を 二十五の鈴に 植え代えて
- ・二十五鈴 九十三枝年の サアエ(37) 夏
- ・茅の輪にただす ミナ月や
- ・われ見る鈴木 千枝四度 わが身も今年 二十四万年
- ・二十五鈴 百枝二十八穂 年サミト(28)
- ・二十五鈴 百三十枝の 年サナト(58) 春の初日に
- ・二十六鈴 十六枝四十一穂 年キヤエ(1) 弥生
- ・二十六鈴 十七枝二十三穂 弥生初日
- ・十二よみを着る 月の数
- ・時二十九鈴 五百の一枝 三十八(穂) 如月 朔日
- ・政、ホツマに整ひて 二万八千年経て 三十鈴の 暦なす頃
- ・三十二鈴 二十三穂ツウエ(23) ウ月初
- ・三十六鈴 三十四枝三十八穂 弥生望
- ・時四十二鈴 八百五十枝 極年ネウト(60) 八月 四日
- ・冬至る日に 大祭り
- ・四十九の鈴の 九百十一枝 初穂キアエ(1)の 初三日
- ・五十鈴の 千枝の二十年
- ・エトの 一周り 明くる年なる 三たのあえ なればニエト キアエ(1)より 枝と穂と 数え 一枝六十 十枝は六百年は 百枝は六千 千枝に六万お あまもりの一周りづつ 暦なる
- ・時に五十鈴 宮に生え

アスス暦の抜粋

- ・二十一穂の キナエ（２１）の春は アメフタ エ 天鈴暦と 名を変えて
- ・天鈴三十三穂 春日神 百五十六万 二十五 なり
- ・天鈴五十穂 カンナ月
- ・光重ねて 百七十九万 二千四七十穂経て
- ・年サナト（５８） 檀原宮の 初年と 御代 神武の 大いなるかな
- ・年サナト（５８） 初日サヤエ（１７）に
- ・サアエ（１）日嗣ぎ アマスベラギ
- ・四穂如月 ネウエ（５９）のキナエ（２１）
- ・四十年 初三日キミエ（５１）
- ・弥生十（日）キヤエ（４１）
- ・時天鈴 百三十四年ツアエ（１４）春 初日サナエ（５７）の二十一日サヤエ（１７）
- ・三十六年のサ月 十日ネナト（４０）
- ・時天鈴 百七十年ネアト（５０）秋フミ三日
- ・キミエ（２７）のシハス キミト（５２）初
- ・時天鈴 二百八穂サミト（２８）キサラ（２） 四日 ネアエ（４９）
- ・二十二年 きさらツシト（４４）ハ 十二日 オシエ（５５）
- ・時天鈴二百四十三年ツミエ（３）春ム（睦）月ツウエ（２３）初 九日キシエ（３１）
- ・時天鈴 三百二十六年 初のナカ
- ・時天鈴 四百二十八年 初十二日
- ・時天鈴 五百四穂ム（睦）月 十四日
- ・時天鈴 五百六十穂冬 メ（十）の十二日
- ・時天鈴六百二十一年 キナエ（２１）春 ム（睦）月ネシエ（１９）初十三日
キシエ（３１）
- ・初年の 如月サウト（４８） 十六日ツミエ（３）
- ・二十九年 初日オウト（３６）
- ・四十八年 初十日オアエ（２５）
- ・六十二年キナト（２２）の秋フ月 キミト（５２）初 ツヤエ（５３）
- ・六十八年 師走オナエ（４５）初 五日ネアエ（４９）
- ・時天鈴 六百八十九年 ネヤエ（２９）春 ム月ツアト（１４）初 オミエ（１５）
- ・四穂ナ月 ツウエ（２３）初オナエ（４５）
- ・二十三年ナ月 ツミエ（３）初の
- ・二十七年八月 七日オミト（１６）
- ・三十七穂初日 オミエ（１５）立つ
- ・時天鈴 七百八十八穂の フ月十一日
- ・天照らす神 暦成し 百七十九 万三千続く
- ・時天鈴 八百四十三穂の 秋天日

ホツマツタエ・エトの作られ方

スス暦・アスス暦の暦記載の抜粋のところで「エト」のことに一部ふれたが、原文エトの作られる元は、三つの言葉である。それは方角と中央を意味する「キツオサネ」組み合わせを意味する「アミヤシナウ」あと兄弟を意味する「エト」である。エトは「五音」「六音」と「二音」の言葉を組み合わせになるため全60通りの「エト」ができる。最初のエトは「キアエ」次は「キアト」になっている。その結果、次のように、ホツマ表「兄弟・エト」表ができる。

ホツマ エト表

エト	四卒	ホツマ	エト	四卒	ホツマ
NO	表	エト	NO	表	エト
1	水○表	キアエ	31	水升表	キシエ
2	水○下	キアト	32	水升下	キシト
3	卒升表	ツミエ	33	卒升表	ツナエ
4	卒升下	ツミト	34	卒升下	ツナト
5	回△表	オヤエ	35	回△表	オウエ
6	回△下	オヤト	36	回△下	オウト
7	回○表	サシエ	37	回○表	サアエ
8	回○下	サシト	38	回○下	サアト
9	表升表	ネナエ	39	表升表	ネミエ
10	表升下	ネナト	40	表升下	ネミト
11	水△表	キウエ	41	水△表	キヤエ
12	水△下	キウト	42	水△下	キヤト
13	卒○表	ツアエ	43	卒升表	ツシエ
14	卒○下	ツアト	44	卒升下	ツシト
15	回升表	オミエ	45	回升表	オナエ
16	回升下	オミト	46	回升下	オナト
17	回△表	サヤエ	47	回△表	サウエ
18	回△下	サヤト	48	回△下	サウト
19	表升表	ネシエ	49	表○表	ネアエ
20	表升下	ネシト	50	表○下	ネアト
21	水升表	キナエ	51	水升表	キミエ
22	水升下	キナト	52	水升下	キミト
23	卒△表	ツウエ	53	卒△表	ツヤエ
24	卒△下	ツウト	54	卒△下	ツヤト
25	回○表	オアエ	55	回升表	オシエ
26	回○下	オアト	56	回升下	オシト
27	回升表	サミエ	57	回升表	サナエ
28	回升下	サミト	58	回升下	サナト
29	表△表	ネヤエ	59	表△表	ネウエ
30	表△下	ネヤト	60	表△下	ネウト

学会の定説と上古ホツマツタエの暦

松本先生は、ほつま9号（昭和49年10月1日）にて「学会の定説」について、『吉村貞司著「旧暦以前の暦」（浪曼六月号）を読むの題で掲載されている。その中で『能田忠亮氏はわが上古に暦法なく素朴な自然暦を以てしてゐたに過ぎないと云ひ、これは同氏ばかりか依然として学会の定説なのだ』それに対し松本先生は、その論旨は十分に人を首肯せしめるものがある。冬至正月説はホツマ伝来上の経過や記述を通してみられる古代暦の実態と一致する。冬至はゲシと読まれてゐるが元は、フユイタルヒ、即ち冬至の日である。』と述べられている。

また著者が今まで「ホツマツタエの暦」を紹介した様にもはや「上古に暦法が存在した」ことは揺るがしがたい事実である。そのことをこの論文で説明しようと思う。

ホツマツタエの暦法

暦は暦法から成り立っている。とは云ったもののホツマツタエの存在年代が未だ正確にわかってない。このため新暦や旧暦が応用できるかをまず検証することにした。だか暦の知識は、新暦が少々のために新暦とユリウス暦は齊藤国治先生の「古天文学」の本より学んだ。また主に旧暦については暦日大鑑（新人物往来社）、暦の百科辞典・暦の会編（新人物往来社）および内田正男先生の「日本書紀暦日原典」より学んだ。

この結果スス暦については、新暦・旧暦・ユリウス暦とも違っていった。

アスス暦については、日本書紀暦日原典に納められている小川清彦先生の「付・日本書紀の暦日に就いて」（昭和21年8月）の支那暦の儀鳳暦などと比較して見た。比較した個所は、「日のエト」である。アスス暦では年月日の日付がわかっていてあとに「日エト」が記載されている個所は21カ所である。その比較結果は、約90.5%は完全一致した。（比較結果の詳細は省略）ことよりアスス暦は「太陰太陽暦」に近いと思われた。

（注記）

暦の初学の人にはなぜ「日のエト」を比較するかと思っていることだろうが、暦日大鑑（発行：新人物往来社）の新旧暦月日対照表496頁に「干支が動く」と朔日が変わり月も変わる」の項目に「日の干支をさぐる法が重要なのであり、”初めに干支ありき”」とあり。暦学では重要なことである。

スス暦、アスス暦の歴史の先導性

だがここで筋論を述べて於かなければならない。それはスス暦とアスス暦の暦としての「歴史の先導性」である。初めにスス暦が作られ、のちにスス暦よりアスス暦に改暦された。そのスス暦は上古代のアマテル神の生まれた頃より前に作られている。その暦を作る言葉ととして、ホツマツタエ原文では、「ヒ

ヨミ」の言葉が原文に5個が記載あり、「昔日読みの 思兼 暦作りて ここにあり」と記載されていた。

日読み神（21文ー30）

	アメヨリクダス
ヒヨミカミ	フタカミコレニ
ヤマサナス	

日読み酉の 日告ぐる（22文ー7）

ヒサカタノ	アマテルカミノ
ハツミヨニ	ヒヨミノトリノ
カオツグル	

日読みの宮に（24文ー6・7・8）

ミツホナル	ホカニソヤカニ
イセキナル	トキニアマテル
ミコトノリ	ヤシマメクレト
フレタマフ	トキフソコスス

キモノヒエ	ミソヤキサラギ
ツイタチト	ムメノハナミノ
ミアエシテ	ヒヨミノミヤニ
カトテノリ	ムカシヒヨミノ

オモイカネ	コヨミツクリテ
ココニアリ	ノチムラクモニ
ユズリオク	ムラクモアメノ
ラントモニ	アスカニシヘル

日読みなす（28文ー49・50・51）

	ミュキノミコシ
マナイニテ	アマテルカミハ
ウチツミヤ	トヨケハトミヤ
カレカスガ	オクリテノチニ

ツトメオク	ミカサヤシロノ
タマカエシ	くにをサメレバ
カレモナシ	マツリノアヤオ
ソツソメテ	ヒトツモチユキ
ヒヨミナス	フタエニサヅケ

ミモスソノ

また太陰太陽暦の言葉は出てこないが、望やユミハリの月に関することが記載されている。「ツキ」は原文に336個所に記載されている。例として2文を紹介する。

月は遅れ（1文—33・34）
マタトフハラヒ
ミソフナリ イマミソヒトハ

コノオシエ アメノメクリノ
ミムソキエ ヨツミツワケテ
ミソヒナリ ツキハオクレテ
ミソタラズ マコトミソヒザ

月に御酒（2文—10・11）
ミキツクリソメ
タテマツル モモトニクメル
ミキニツキ ウツリススムル

メカミマズ ノミテススムル
ノチオカミ ノミテマシワル
トコノミキ

このことから太陰太陽暦が使われていたことも十分うかがわれる。この様に太陰太陽暦で作られた暦だから支那暦の儀鳳暦などでも解けることになった。比較の儀鳳暦などの支那での制作は西暦443年元嘉暦、儀鳳暦は西暦663年作と後世のものであることは暦学書に記載されていることである。

（参考）

渡来・干支

それに対し中国からの渡来干支は、10干12史で構成している。10干は、甲乙丙丁戊己庚辛壬癸の10個。12史は、子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥の12個になる。10干12史の全組み合わせは60通りとなる。

渡来・干史

干支	干支
NO、干支	NO、干支
1 甲子	31 甲午
2 乙丑	32 乙未

3	丙寅	33	丙申
4	丁卯	34	丁酉
5	戊辰	35	戊戌
6	己巳	36	己亥
7	庚午	37	庚子
8	辛未	38	辛丑
9	壬申	39	壬寅
10	癸酉	40	癸卯
11	甲戌	41	甲辰
12	乙亥	42	乙巳
13	丙子	43	丙午
14	丁丑	44	丁未
15	戊寅	45	戊申
16	己卯	46	己酉
17	庚辰	47	庚戌
18	辛巳	48	辛亥
19	壬午	49	壬子
20	癸未	50	癸丑
21	甲申	51	☆甲寅
22	乙酉	52	乙卯
23	丙戌	53	丙辰
24	丁亥	54	丁巳
25	戊子	55	戊午
26	己丑	56	己未
27	庚寅	57	庚申
28	辛卯	58	辛酉
29	壬辰	59	壬戌
30	癸巳	60	癸亥

アスス暦の暦法の立証

先に「ホツマツタエの暦法の項にて、アスス暦では年月日の日付がわかっていてあとに日エトが記載されている個所は21カ所である」と説明した。「太陰太陽暦」であろうとも説明した。この様に21カ所の「あるできごとの穂エト・月・日エト」を使ってアスス暦などの暦法を長年研究してきた。この結果二つの「日エトの簡易検算式」を作成する。できあがった二つの式は「月の巡りを1カ月とした月暦」である。また二つの式の1年は約384日或いは約264日で「日エトが検算」できる。このことで「アスス暦は純粋に暦法である」ことの証明につながった。

本式はロータス統計ソフトで作成しているが、紙面の都合で省略になる。ここでは家庭用の電卓で計算できる様に利便性を持たせた「式」で紹介する。また私としては長年「月暦」から抜け出せなかったが、ようやく「アスス暦は太陰太陽暦である」の確証を得ることができたので紹介する。これでアスス暦とグレゴリー暦などの暦との相関を導く環境は整ったことになる。

日エトの簡易検算式

式

○ある日からの経過日数（TD）の算式

経過日数（TD）＝年（Y）＋月（M）＋日（D）

○経過日数→日エトへの換算式

エトのナンバー＝ $TD / (60) \times 60 + \text{補正}(t)$

○算式への代入値

Y＝（アスス穂－1）×1カ年の日数（y）

M＝（アスス月－1）×1カ月の日数（m）

D＝アスス日 ×1カ日の日数（d）

（60）：エトの60で割算し小数点部を残す意

t＝日本書紀暦日原典の神武天皇初日のエトナンバー17.82に揃える値

月暦の1カ年約384日のy、m、d代入値

y＝384.19488082

m＝29.546927616

d＝0.9979035975

t＝17.81823149

月暦の1カ年約264日のy、m、d代入値

y＝264.194653936

m＝29.581640788

d＝1.0200565793

t＝17.7046692

（注記）

tの設定

神武天皇初年1月1日の日エトは、ホツマではホツマエトナンバー17。日本書紀暦日原典ではエトナンバー17.82である。発見した式での計算日エトは約60になるために日本書紀暦日原典のエトナンバー17.82になる様に揃える値（t）を設定した。式により違う。

簡易検算式での日エト計算と結果

計算方法

まず21カ所の最初の神武天皇初年1月1日を計算する。まず神武天皇初年は、ホツマツタエ原文を読むと「年エトは、サナト（58）」である。1日の「日エトは、サヤエ（17）」である。次ぎに式「日エトの簡易検算式」に58年1月1日を入力する。（計算途中は省略）同じ様に21カ所を計算する。次の表は1カ年約264日の式にて作成した表になる。

（簡便式の推算エトは、式の違いや計算機の違いにより本式での計算値とに違いがでることもある）

【記録エトと推算エトが完全に一致する】

天皇名	年	月	日	日エト→	推算エト	判定
神武天皇	初年	一月	一日	一七 →	一七. 八二	○
同	四年	二月	一日	五九 →	五九. 九八	○
同	四二年	一月	三日	五一 →	五一. 八四	○
綏靖天皇	三六年	五月	一〇日	一〇 →	一〇. 九三	○
懿徳天皇	初年	二月	四日	四九 →	四九. 二四	○
孝昭天皇	初年	一月	一日	二三 →	二三. 四一	○

↑

この間には年月日の記録に対し日にエトが見られず

↓

崇神天皇初年	一月	一日	一九	→	一九.	四一	○
同 二九年	一月	一日	三六	→	三六.	八六	○
同 四八年	一月	一〇日	二五	→	二五.	七三	○
同 六二年	七月	一日	五二	→	五二.	七七	○
同 六八年	一二月	一日	四五	→	四五.	八五	○
垂仁天皇初年	一月	一日	一四	→	一四.	二二	○
同 四年	九月	一日	二三	→	二三.	四六	○
同 二三年	九月	一日	三	→	三.	一六	○
同 二七年	八月	七日	一六	→	一六.	四八	○
同 三七年	一月	一日	一五	→	一五.	六五	○

【記録エトと推算エトの差が一とエト】

天皇名	年	月	日	日エト→	推算エト	
神武天皇七六年	三月	一〇日	四一	→	四〇. 七六	△
綏靖天皇 初年	一月	一日	五七	→	五六. 六一	△
安寧天皇三八年	一二月	六日	五二	→	五三. 三二	△
崇神天皇 初年	二月	一六日	三	→	四. 二八	△

【記録エトと推算エトの差が五とエト】

天皇名	年	月	日	日エト→推算エト	
懿徳天皇	二二年	二月	一日	四四→三八、四六（注記） → 四四、六九	✕ ○

（注記）御世→アスス暦への変換ミス訂正

解読改訂05.04.22 アスス230→229年 誤差±6→0

日エト簡易検算式の精度

本式での精度を検証する。式の条件は1カ年約384日の式では1カ年約384.195日になる。1カ年の月数は13.003カ月、1カ月約29.55。1日は約0.998日になる。また1カ年約264日の式では、1カ年は約264.195日になる。1カ年の月数は約8.93カ月、1カ月の日数は約29.58日。また1日は1.02日になる。

検算値の精度は二つの式ともをアスス暦のホツマツタエ原文の日エトと計算日エトを比較すると、日エト差で±0日にて76%。±0～±1日を含めて約95%の精度になる。暦日の検算式としては、精度の高い方になる。

(注記)

計算した日エト結果が、エトナンバーで±30前後違う場合は、閏月と思われるので月名を+1ヶ月して計算を試みる。

1 力月=約29.55 日=約29.58 日

満月が薄暮に浮かぶ姿は「明日の幸せを約束してくれる」と感じる。まして年始めに満月は縁起がいい。西暦1998年のことだったと思う。1月2日は満月だった。またその年の12月23日は満月であった。満月の回数を数えると12回になった。その間の日数は式、 $365日 - 2日 - (31日 - 23日)$ で355日になる。満月～満月までの月齢を計算すると式、 $355日 \div 12日 = 約29, 53日$ になる。

このことから先に「日エト簡易検算式」で算出した約29.55日や約29.58日では、天上の現象を目視で見た月齢の約29.53日とに比較して百分の2～5の違いはあった。また暦の百科辞典を見ると1朔望月は、29.530589日になっていた。

なぜ月齢のお話をしたかと云えば上古代のホツマツタエの記載の頃も、天上の現象を見て生活のための暦を作っていただろうと思われ「日エト簡易検算式の作成の一助となった。

アスス暦と日本書紀の暦の比較

ホツマツタエ原文を研究する時に、日本書紀（武田祐吉校註：底本・北野神社本）を片手にして勉強する機会がある。それはホツマツタエが日本書紀や古事記の原典であるからである。古事記には暦の記載が少ないために暦日の記載が多い日本書紀と暦日の記載が多いホツマツタエを比較した。また比較は神武天皇以降について比較した。比較は同じ「できごと」の暦記載について、41カ所を比較した。このうち両書の記載の内に記事の「できごと」の内容は合っているが、暦日の年月日が違うところを抽出した。違う日と回数は次の通り。

この結果から見て±0日の日が13個で一致率が31%から見てアスス暦と日本書紀暦は、違う暦日であることがわかる。（比較詳細は紙面の都合で省略）

±0日・・・13個、±4日・・・1個
±1日・・・4個、±2日・・・6個
±5日・・・1個、±6日・・・1個
±9日・・・1個、±10日・・・1個
±11日・・・1個、±12日・・・7個
±13日・・・1個、±20日・・・1個
±24日・・・1個、±2カ月・・・1個
±4カ月・・・1個

更によく見ると、±2カ月、±4カ月違いが各1カ所ある。この二カ所の暦日の違いは、故意なのかまたは、アスス暦を日本書紀暦に置き換えた時の「暦の違い」からくるものか今後の研究が待たれる。

アスス暦の太陰太陽暦の証明

月暦は、月の公転を基準とする。月の公転は、1朔望月で表され29.530589日になっていた。また太陽暦は地球の公転を基準する。1年は、西暦1900年1月0日12時の回帰年（時と暦：青木信仰著）と定義してある。

それに対しアスス暦では上古代のため現在ではわからないが、日のエトを計算することで1朔望月に価するものが1カ月が約29.55日～約29.58日とつかめている。また月暦の1カ年は約384.195日あるいは約264.195日をつかめている。

（注記）

太陰太陽暦のお話

簡単にお話すると毎日の日付けを月暦で運用していく。すると1カ月29.53日として1年の12カ月の経過日数は354.36日となる。太陽暦の1年は約365.24日になるので、約354.36日から約365.24日を差し引くと約10.88日不足する。

不足を解消するために13カ月にすると約384.15日になる。約384.

15日から約365.24日からを差し引くと約18.91日多くなる。この「約10.88日不足や約18.91日多く」は1年間のことである。この繰り返しを続けると「猛暑の時期に正月がくる」など暦の日付けと季節がズレが生じ不自然になる。これを解消する暦法が太陰太陽暦である。

アスス暦の太陰太陽暦の足跡

ホツマツタエ原文には、太陰太陽暦の言葉はない。だが数少ないが記録として上古代のアメスメラギ（古語の天皇名）の初年正月初日に「春」の「季節」を残している。それは第2代綏靖天皇初年、第5代孝昭天皇初年、第10代崇神天皇初年および第11代垂仁天皇の初年である。このことから太陰太陽暦で運用していたことが伺われる。

ホツマツタエ原文訳（アスス暦の抜粋項より）

- ・時天鈴 百三十四年ツアエ（14）春 初日サナエ（57）の二十一日サヤエ（17）
- ・時天鈴二百四十三年ツミエ（3）春 ム月ツウエ（23）初 九日キシエ（31）
- ・時天鈴六百二十一年キナエ（21）春 ム月ネシエ（19）初十三日キシエ（31）
- ・時天鈴 六百八十九年 ネヤエ（29）春 ム月ツアト（14）初 オミエ（15）

アスス暦の太陰太陽暦

ここで太陰太陽暦のお話をアスス暦に置き換えて、アスス暦の太陰太陽暦を立証する。アスス暦の日付けを月暦で運用していく。月暦は、1カ年約384日と1カ年約264日の二つあるが、1カ年約264日の運用では2年目の正月にすぐに季節ズレが生じる。従ってアスス暦の運用されていた月暦は、1カ年約384日であったと思う。これを平年月暦と呼ぶことにする。すると1カ月は29.546927616日として1年の12カ月の経過日数は354.563131392日となる。太陽暦の1年は約365.242198781日になるので、約10.679067389日不足する。

なお日エト簡易検算式にて1カ年は約384日にて「日エト」が計算してあるため、ここでは13カ月のかわりに1カ年の経過日数の約384.19488082日を使用する。すると約18.952682039日多くなる。この「約18.95日多く」は1年間に限ったことである。この繰り返しを続けると「6年目で約113.72日多くなり」と約4カ月のズレが生じ季節がズレる。これを解消するため「7年目」に1カ年約264日の経過日数264.1946539366日を置く。この1カ年約264日を平年月暦に対し閏月月暦と呼ぶ。すると約4カ月の差は約+12.7日まで縮まる。

この様に年を繰り返して12年目に又約107.43日のズレがでる。このことで13年目に1カ年約264日の閏月月暦を置くと約6.38日に縮まる。更に年を重ねて18年目に約101.15日のズレがでる。19年目に1カ年約264日の閏月月暦を置くと僅少日の約0.10日に縮まる。

この様にアスス暦は、「19年周期の太陰太陽暦」であるとも云える。「平年は384日、閏年に264日を7年目、6年目、6年目に置くことで月・季節のズレを補正」することができる。

ひとこと

今までホツマツタエを教材に、「ホツマツタエの暦の考察」を述べてきた。だがホツマツタエは今だ皆さんに理解され愛読されるに十分でないが、本文を読んだ方々は、少なからず小さな心の驚きを感じられたことでしょう。その驚きで「上古代にすでに暦法を使ったアスス暦が存在した」ことを認めたことにもつながる様な気がする。このことは「ホツマツタエ」の存在がいかに大きいかにつきると思う。今回はスス暦の暦法はあえて省いたが、私の研究としての「スス暦の暦法式」はすでにできあがっている。また機会があればご紹介したい。

以上

【参考文献】

秀真伝（ホツマツタエ）に 古代ロマンを求めて（自編：01年6月1日）
ホツマツタエ（安聰本）
日本書紀（武田祐吉校註：底本・北野神社本）
原本現代訳日本書紀・上中下（山田宗陸訳）
日本書紀暦日原典（内田正男編書）
暦の百科辞典・暦の会編（新人物往来社）
暦日大鑑・明治改暦～2100年（西澤宥綜編著）
古天文学（齊藤国治著）
時と暦（青木信仰著）
年表世界史（山口修編）

【注記】

本文は、自編の「秀真伝（ホツマツタエ）に古代ロマンを求めて」から短文に編集した。また一部は新人物往来社発行の歴史研究（平成十二年十一月号）の特集に掲載された「暦法で考える欠史八代」にリライトし投稿した。その後、研究し「日エト簡易検算式」「アスス暦の太陰太陽暦」を付け加えた。